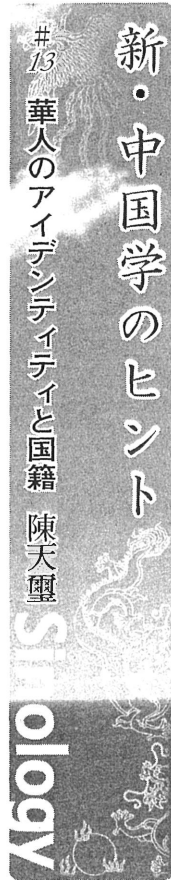


華人のアイデンティティと国籍（新・中国学のヒント, 13）

著者	陳 天璽
雑誌名	東方
巻	366
ページ	10-11
発行年	2011-08-05
URL	http://hdl.handle.net/10502/5257

新・中国学のヒント



◆個人と国家の関係を多角的に見る

■地球市民的な一面

『コスモポリタンな資本家 (Cosmopolitan Capitalists)』(Gary G. Hamilton、一九九九)や『柔軟な市民権 (Flexible Citizenship)』(Aiwa Ong、一九九九)と喩えられてきたように、華人は、世界を股にかけるような柔軟な適応力と、自民族でつながった強靱なネットワークに基づく、国際的な活躍で彩られてきた。

多くの人が経験していると思うが、海外旅行に出かけた際、意図もせずチャイナタウンに出くわすことがある。それらの街は、他人を寄せ付けない排他的なエスニックタウンというよりは、むしろ観光地として名を馳せていることが多い。そうした世界各地のチャイナタウンの生成や繁栄にも見られるように、華人は世

界各地に根を張り活発な経済活動を行っている。ときには、東南アジアに見られるように、国家経済の中核を牛耳るほどの経済力を有することもある。

そのためか、これまで華人に焦点をあてた研究は、彼らの民族的紐帯の強さ、新しい環境への適応力の高さ、広汎かつ活発な経済活動のあり方を描いたものが多かった。ときに「中華経済圏」や「華人ネットワーク」と称された。私自身も、華人ビジネスマンのネットワークとアイデンティティの真相を解明するべく、華人研究に着手し『華人ディアスポラ』(陳二〇〇二)にまとめた。そこで、明らかとなったことがある。われわれは、しばしば華人を民族的な紐帯で一括りにしがちであるが、実は、彼らは華人としてのアイデンティティのみで繋がっているのではなく、むしろ、移民経験ゆえに多重

なアイデンティティを有しており、目的に合わせそれらを取捨選択し、多様な人々とネットワークを築いていることであった。彼らのネットワークとアイデンティティは、実に可変的であり、確固としたものではない。そのため、私は、見えては消える、自然現象の虹に喩えた。

■国に基づく世界システムのなかで
私が、空にかかった虹が国々の橋渡しになるとイメージしたように、世界を自由に渡り歩く華人の様子を、アイワ・オン (Aiwa Ong) は「宇宙飛行士」(astronaut)に喩えた。華人が世界中を飛び回り、国家制度や国境(ボーダー)から自由である一面を、実に、うまくあらわしている。しかし一方で、華人が常に国際情勢、そして国の政治や制度に翻弄されてきた存在であることも事実である。

そもそも、華人の生成、つまり、彼らが生まれた土地を離れ外国に移住したと、また、一旦定住した土地を離れ再び他の国に移住するという再移民の動きは、彼らの祖国である中国大陸や台湾の政治変動、または定住していた居住国の

政策や社会の影響を受け、引き起こされている。

たとえば、第二次世界大戦後の中国における国共内戦の結果、多くの人が故郷を離れ各国に離散したこと。一九七〇年代ベトナム戦争の際、すでにベトナムに定住していた華人たちが、迫害や排斥に遭い、戦禍を逃れアメリカやフランスなどに再び移住したこと。はたまた、一九七七年の香港返還を前に、香港在住の多くの華人が、中国返還後の香港の経済的・社会的な不確実性を恐れ、カナダやイギリスに再移民した動きなど、まさに華人が国々の政治変動にセンシティブであることを物語っている。

■華人研究に期待する今後のテーマ

華人研究では、歴史的研究をはじめ、華人の経済、教育、文化などをテーマとした研究の蓄積が厚い。しかし、国々の政策、市民権や国籍問題など政治的・法的な問題を真つ向から議論しているのは『国家と移民』（田中恭子、二〇〇二）が思い当たるぐらいであり、先行研究は限られている。

中国が世界のなかでますます存在感を拡大しつつある一方で、中国が分裂状態のままである以上、中国大陸や台湾の対華橋政策、居住国の法制度など、彼らをとりにまく政治的、法的な問題は、彼らの命運を大きく左右する重要なテーマである。

これまで華人を研究対象とした場合、民族的帰属が前提にあり、それが自明、もしくは当然のこととされてきた。しかし、オリンピックがそのよい例であるように、国民国家を基盤とした現代社会では、国の枠組みによる区分が基本となっている。そのため、人の所属は国籍に依拠することが増えている。たとえば、国家間の移動や身分保障は、所持するパスポートや身分証に書かれている国籍に依拠するのが基本となっている。国籍によって人の権利義務が区分され、それが民族的帰属よりも実効力を持つのである。重要なのは、華人たちのなかには、重国籍の人もいれば、無国籍の人たちも存在する。国籍を思いのまま選択し「宇宙飛行士」のように自由に越境する華人が

いる一方で、国々の制度の狭間に落ち、どこにも所属せず、透明人間のように人として十分な権利を享受できない人々がいる。こうした研究は、まだ十分に着手されていない。

中国の成長、そして国際情勢の変動は、華人一人ひとりのアイデンティティや法的身分にどのような影響を及ぼすのか。国という視点だけで捉えるのではなく、同時に国が個人にもたらす影響力を視野に入れ、個人と国家の関係を多角的に考察する必要がある。換言すれば華人たちの個人史というミクロな歴史を紡ぎながら、彼らのマクロな世界観を透析するような研究が、求められている。

*陳天璽(チェン・ティエンシ/ちん・てんじ)国立民族学博物館准教授。文化人類学、国際政治経済学(華僑華人、無国籍者)専攻。論著に『華人ディアスポラ』(明石書店、二〇〇一年)、『無国籍』(新潮社、二〇〇五年)、『忘れられた人々——日本の「無国籍」者』(編著、明石書店、二〇一〇年)ほか。